

危険ドラッグ根絶を

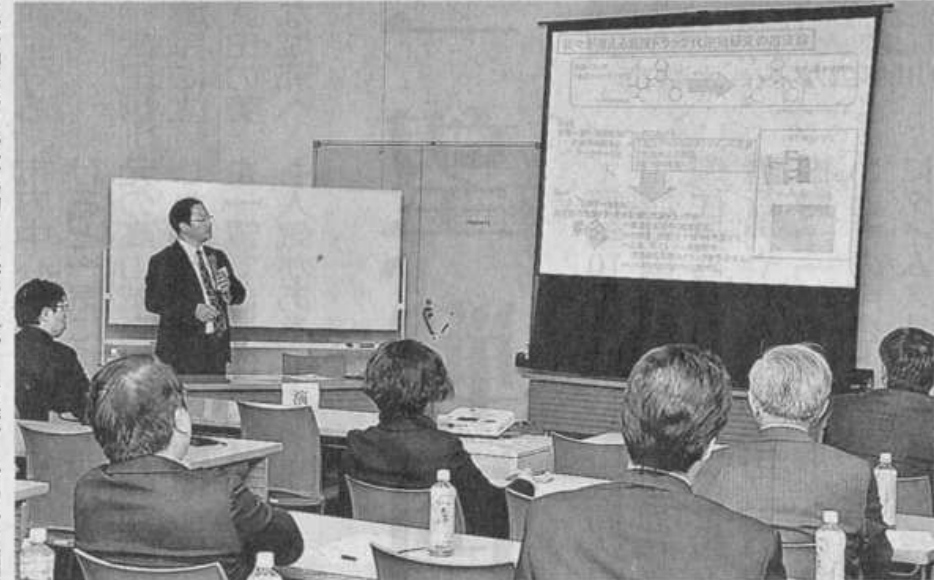
岐薬大と県保健環境研、研究成果発表

危険ドラッグの研究に連携して取り組む岐阜薬科大（岐阜市）と県保健環境研究所（各務原市）は研究成果などを示し合う「第4回岐阜危険ドラッグ解析技術連携協議会」を岐阜市橋本町のじゅうろくプラザで開いた。（古家政徳）

新種の解析通じ 使用リスク示す

幻覚や興奮などの作用をもたらす社会問題となつている危険ドラッグは、生化学的な知見が不足しているため、物質的な構造を変化させた新種が次々とつくり出され、規制が追い付いていない。分析技術の確立が急務で、同大と同研究所が2014年度から連携して研究している。協議会には関係者約25人が出席。あいさつ

で、同大の稲垣隆司学長は「危険ドラッグを根絶しなければ、将来への影響は計り知れない」と改めて連携の意義を強調した。発表では、同大の北市清幸教授が「合成力（ナビノイド系）」と呼ばれる大麻に似た作用を持つ危険ドラッグについて、体内に蓄積された量が半分になるのに要する時間「半減期」の研究を紹介。新種は



危険ドラッグに関する研究成果について話し合った協議会＝岐阜市橋本町、じゅうろくプラザ

半減期が最大約2時間と相対的に長く「使用のリスクが高まっており、従前以上に注意を払うべき」とした。同研究所の伊藤哲朗生活科学部長は、インターネットなどで売買されている危険ドラッ

グを購入して調べる「買い上げ検査」の結果などを披露。構造や作用が判明した危険ドラッグのフラグメント（断片）の保存・収集により、新種の解析を迅速化できる可能性を示した。